

日本の絹の美しさとファッション

静岡文化芸術大学大学院 教授

京都服飾文化研究財団チーフキュレーター 深井 晃子

1. <ジャポニスム>

江戸時代日本の長い文化的閉鎖の後、19世紀後半になって、日本文化と西欧文化は邂逅する。当時、ヨーロッパの前衛的な芸術家たち（後に印象派と呼ばれることになる）は、新しい表現を求めて閉塞していた伝統の枠組みから抜け出そうともがいていた。そうした折、彼らがはじめて目にした日本からもたらされた芸術文化は、異国趣味をそそるというだけではなく、それまでの西欧文化が持たない新鮮なものとして彼らの目に映り、彼らは日本の芸術をはじめとして日常的なさまざまな品々に目を見張った。

やがて西欧に日本的な影響が広がっていくことになるのだが、それはまず、絵画の分野に現れたのである。こうして19世紀末から20世紀はじめにかけて、日本の影響は広く欧米の生活のさまざまな分野にまで広がっていったのである。

この、いわゆる<ジャポニスム Japonism>と呼ばれる現象の中で、きもの・絹は、どのように捉えられ、欧米のモードにどのような影響を及ぼしたのかを、検証していきたい。そして現在についても目を広げていきたい。

2. 印象派の絵画の中に現れた<きものと絹>

万博が欧米各地で開かれるようになり、あるいは西欧に流入した日本品などから日本への興味が広がっていく。それをいち早く取り上げたのは当時の前衛的な画家たちだった。彼らの多くは後に印象派と呼ばれることになる画家たちだったが、その筆によってきもの、そして絹はどのように描かれているか。日本でもよく知られた以下の画家たちの絵の中に描きだされたきもの、そして絹地について見ていく。

J=M.ホイッスラー

ジェームス・ティソ

エドワール・マネ

クロード・モネ

オーギュスト・ルノワール

3. パリ・モードとなったきものの柄と質感

19世紀末、きものの柄は、フランス的に脚色されながら最新のパリ・モード、オート

クチュールに登場する。このころのパリ・モードには、菊、流水紋、かえで、あやめ、波にツバメなど、そのまま日本の柄のようなデザインがしばしば見られる。

また、20世紀になると女性たちはそれまでのコルセットを脱ぎ捨てて、あたらしい20世紀のモードへと着替えていくことになるが、女性たちのモードは、それまでの張りのある生地ではなく、しなやかな質感へと変化していった。これにより、パリ・モードの生地生産地であったリヨンの織物業者はそれまでの織機を新しいものに替えなくてはならなくなった。このとき、リヨンの絹織物業者たちが、参考にした質感のひとつは、日本の絹地のしなやかさだった。

4. 室内着として欧米の生活の中へ入り込むキモノ

1900年、パリで華々しくパリ万博が行われた。日本人女優・川上貞奴はパリで公演し、彼女の舞台姿はパリで大評判となる。それは彼女の美貌とともに、彼女が着こなすきもののあでやかさ、流麗さだった。

<キモノ>という語は、広く知られることになり、日本製、あるいは欧米製の kimono が、室内着として欧米の人々の日常生活に取り入れられていく。通信販売のアイテムとしても人気があったほどである。

Kimono の語は欧米で、室内着を意味する普通名詞となって定着している。

5. 現代ファッションときもの

ディオール（ジョン・ガリアーノ）、グッチ（トム・フォード）など、現代の人気デザイナーたちが取り上げたきものの、若者たちが着こなすきものについてみていながら、着物、そして絹地の今後を考える。

<参考文献>

深井晃子著「ジャポニスム イン ファッション」平凡社 1994年

深井晃子監修「モードのジャポニスム」京都服飾文化研究財団 1994年